

会議記録

会議名	平成28年度 第2回 杉並区文化・芸術振興審議会
日時	平成28年10月25日(火) 午後6時01分～午後7時47分
場所	杉並区役所 西棟6階第5・6会議室
出席者	<p>[委員] 佐藤信(会長)、板倉徳枝、菊地一浩、後藤朋俊、坂根シルック、鈴木伸一、谷原博子、中村陽一、花柳琢兵衛、ヤマザキミノリ、米屋尚子</p> <p>[区] 地域活性化担当部長(安藤利貞)、区民生活部長(井口順司)、文化・交流課長(幸内正治)</p> <p>[事務局] 文化・交流課</p>
欠席者	
配布資料	<p>資料1 文化・芸術振興事業の概要</p> <p>参考資料 第3回杉並区文化・芸術振興審議会の開催について</p>
会議次第	<p>[議事]</p> <p>1 開会</p> <p>2 報告事項</p> <p>(1) 文化・芸術振興事業の概要</p> <p>「東京2020 アクション&レガシープラン2016」を受けて(自由意見)</p> <p>3 その他</p>
主な発言	別紙のとおり

発言者	発言内容
	－ 開会 － （午後6時01分）
	1 開会
文化・交流課長	定刻になりましたので、平成28年度第2回杉並区文化・芸術振興審議会を開催いたします。これより議事進行は会長にお願いいたします。
会長	こんばんは。お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。第2回の杉並区文化・芸術振興審議会を開かせていただきます。まず、事務局から何か伝達事項ありましたらお願いします。
文化・交流課長	本日、米屋委員が少し遅れると伺っております。また、傍聴者はいらっしゃいません。
会長	では引き続いて、資料の確認をお願いします。
文化・交流課長	配付資料の確認をさせていただきます。まず、資料1として、「文化・芸術振興事業の概要」、それに関連したパンフレットをおつけしております。また、参考資料として、「第3回杉並区文化・芸術振興審議会」のご案内をお配りしております。不足資料がございましたら、お知らせください。また、ご持参いただく資料「東京2020 アクション&レガシープラン2016」ですが、もし、今日お持ちでない方がいらっしゃいましたら事務局ご用意してありますので、お知らせください。
会長	では、皆様、よろしいでしょうか。資料は、大丈夫ですか。
	2 報告事項 文化・芸術振興事業の概要 「東京2020 アクション&レガシープラン2016」を受けて（自由意見）
会長	それでは、次第に従いまして、まず報告事項「文化・芸術振興事業の概要」について、事務局から説明をお願いします。
文化・交流課長	それでは、A4の裏表の資料をご覧ください。「文化・芸術振興事業の概要」というのは、杉並区で今年度実施している文化・芸術振興事業をまとめたものです。まず、1番として「日本フィルとの友好提携事業」です。こちらに記載してあります「杉並公会堂シリーズ」から「エデュケーションフェスティバル」まで様々な事業を実施しております。具体的な内容は別添のチラシをご覧ください。こちらは、杉並区と日本フィルとの友好提携事業をまとめたものとなっております。開いていただきますと、一番上の「区役所ロビーコンサート」ですが、年4回、平日のランチタイムに区役所のロビーで実施しております。また、杉並公会堂でオーケストラのリハーサルを無料で区民の方々に見ていただく「公開リハーサル」を年4回実施しております。また、小中学校を対象にした「出張音楽教室」を年10回ほど、希望する学校で実施しております。小中学校以外ですと、「出張コンサート」

として年15回ほど、保育園、地域区民センター、高齢者施設など、区の身近な施設へ日本フィルが出張しコンサートを開催しております。その他にも「春休みのオーケストラ探検」、これは子どもたちの教育的事業ということで、オーケストラの楽器に直接触れてもらうようなことを中心に行っています。また、日本フィルの「杉並公会堂シリーズ」として、区と実行委員会を作りまして、オーケストラのシリーズを実施しております。こうした様々な杉並区と日本フィルとの友好提携事業を毎年実施しております。

次に、2番の「区民ギャラリー」ですが、区役所中棟の2階にあります区民ギャラリーを活用して、希望する区民の創作作品の展示を、年間41件程度実施しております。参考として次回実施されるチラシを入れてあります。「杉並で、こんなマンホール！？展」という展示で、11月14日から25日まで開催いたします。

続きまして、3番の「文化・芸術振興審議会」ですが、本日実施をしているこの審議会です。

4番の「文化・芸術活動の助成」。こちらの事業は、区民又は区内に活動拠点を持つ団体等が行う文化・芸術活動に対して、事業にかかる経費の一部を助成するというものです。こちら資料を添付しておりますが、このような事業の助成を行っているところです。

続きまして、5番「情報誌『コミユかる』」です。こちら今回お配りしておりますが、タブロイド判の情報紙を年に6回、奇数月に発行しております。区民の皆様に公会堂、座・高円寺などで行われる事業を中心にお知らせしております。

6番「杉並ゆかりの文化人アーカイブ事業」ですが、こちらの事業もチラシを入れてあります。区にゆかりのある文化人・芸術家に焦点を当てまして、その人となり、文化芸術活動の足跡、作品にかける思い等を映像にまとめ、区の貴重な文化財産としてDVDに記録・保存しました。こちらは小学校、中学校、全校に配布し、教材としての活用と、図書館での貸し出し、区ホームページからも見られるようにして、皆さんに周知をしているところです。資料の裏面をご覧ください。これまでの出演者として、洋画家の佐野ぬいさんを初め、女優の渡辺美佐子さんなど、昨年度までで8人の方々を取り上げました。今年度は、先日人間国宝に認定をされました能役者の野村四郎さん、日本語学者の金田一秀穂さん、奇術師の藤山新太郎さんの3名を加え、合計11名の方々のアーカイブ映像を作成しています。

続いて、7番の「『古典の日』関連事業」ですが、11月1日が「古典の日」として国の法律で定められたことを踏まえ、日本の古典について、子どもたちが気楽に楽しみ、体験できる事業を実施しております。こちらチラシがございますが、今年は11月19日座・高円寺で実施をすることになっております。今回の内容は、日本各地で演じられてきました奉納

	<p>芸能である太神楽と浪曲の鑑賞と昔あそびの体験を実施する予定です。</p> <p>最後に8番の「協働提案事業『すぎなみ戦略的アートプロジェクト』」ですが、これは区の協働提案制度を活用して「地域の民間施設などを活用した展示など、文化・芸術を育むための環境づくり」の推進、区立施設だけでなく、民間施設も活用し、喫茶店や、銀行等を「まちなかギャラリー」、として登録し、様々なアーティストの作品を募集して展示する。ある一定期間、まちなかの様々な場所をギャラリーとして活用していく。「まちなかギャラリーマップ」を作成配布し、まちの中で作品に触れていただくという事業を実施しています。</p> <p>簡単ですが、区の取り組みとしては以上でございます。</p>
<p>会長</p>	<p>どうもありがとうございました。</p> <p>今、区が実施している文化事業について、多彩な、色々な方面で、きめ細かに実施されている事業についてご説明がありました。</p> <p>その他にも杉並公会堂、あるいは私が監督しております座・高円寺、それから日本フィルを初め、もちろんアニメーションミュージアムもそうですけれども、杉並区が潜在的に持っているハードとしての資産、そこで行われているソフトとしての資産は多彩なものがあると思います。このようなものを連動させて、次のオリンピック・パラリンピックに向けて、杉並独自の文化プラン、プログラムを実施していくことをこれから考えていかなければならないと思っております。</p> <p>今日は、今ご報告いただいた内容や、この「東京2020 アクション&レガシープラン」ですが、あまりこれに捉われることなく、ざっくばらんにお話いただく。どんなことをやっていったらいいのか、やっていくにはどういうことに留意したらいいのかということを、あまり系統だって狭苦しく考えずに、ご意見をいただいて、それから段々に集約しながら積み上げていこうと思っております。</p> <p>ただ、審議会ですので、杉並区として、オリンピックに向けて何に重点を置いてどういう形で実施していくかということは、最終的に結論を出さなければなりません。しかし、それを先取りしてしまうと、すごく夢が小さくなってしまいますので、今日は全く無理なことでも構わないので、お話いただければと思います。</p> <p>前回同様、お一人ずつ委員の皆さんからお話をいただきたいと思っております。では、会長を皮切りに、最後は副会長のご意見をいただくことにします。</p> <p>私は、3つほどポイントを考えております。</p> <p>1つは、何か大きなことをやるというやり方ではないほうが良いのではないかと。つまり、政府や東京都も、とても力を入れている事業なので、これから色々な助成金が付いたり、大きくする機会があると思うのです。けれども、やはり大きいもの、一過性のものに終わらせたくないで、「レガシー」というか、「遺産」という形で残すというのがどうか、と思つて</p>

	<p>いることがあるのです。継続的に何かやれるきっかけづくりをしたい。もちろんきっかけづくりに連動するために大きなことをやるという考えは良いのですが、イベント的に何か大きなお祭りをやりましょうという考え方は良くないのではないかと。</p> <p>そこで考えた時に、やはり杉並区は、幾つかポイントがあると思うのです。1つは、未来へつなげるという意味では子どもですね。子どもたちに何をやるか。次に、お年寄り、高齢者、つまり文化的な事業になっていくというか、享受すべきなのは、やはりその2つ。今、実際に仕事をしている方ではなく、その両脇に焦点を当てる必要はないだろうかというのが、2つ目です。</p> <p>3つ目は、もっと杉並区にある資産、大変美しい場所もたくさんあるし、歴史的に由緒ある場所もたくさんある。高円寺の阿波おどりを始めとして、海外の方たちにも見ていただけるようなものもたくさんある。例えば、能楽堂もありますし、そういうものをまとめて、外へ紹介する。</p> <p>特に、私が足りないと思うのは、外国語での紹介です。国や東京都も観光に力を入れているのですが、今までのような名所旧跡だけではなく、もう少し町並みの面白さのようなものを紹介する。簡単なものでいいので、英語だけではなく、色々な外国語がうまくリンクしていくような仕掛けがつかれないだろうかと思えます。印刷物ですと分厚いものになってしまうので、印刷物で簡単に紹介しておいて、後はインターネットで見られるようにする。小さい形でも立ち上げておけば、誰か関心のある人が育てていくことができるのでは、と漠然と考えております。</p> <p>それでは、私が言ったような本当に荒っぽいことで結構ですので、お一人お一人伺いたいと思えます。では、具体的な活動なさっている、日本フィルの後藤さんから。日本フィルというコンテンツを使ってどのようなことをお考えになるかというあたりからお話してください。</p>
委員	<p>オーケストラ連盟でも、オリンピックに向けて何かをやりましょうといっても、具体的にはあまりにも広すぎて、結構難しいと思うのです。ロンドンオリンピックでは色々なことを活発にやっていたけれども、ロンドンから1つ離れてしまったら、それほど盛り上がっていなかったということも聞いております。</p> <p>我々オーケストラをやっていると、常に聴衆が対象ですが、やはり未来に向けて子どもたちに何か音楽を通してできるもの、それから、今は高齢化社会なので、お年寄りの生きる喜びを提供できるものがあると良いと思っております。ただ、それを具体的にというとなかなか思いつきませんが、打ち上げ花火的なものよりも、ずっと続けていけるようなもの。すぐ答えを出さなくても、気付いたら10年、20年後に杉並ででき上がっていたというものがつくれば良いと思うのです。</p> <p>ただ私は、もちろん東京もですが、今忘れられてきている被災地との連携、東京にいる我々と、向こうにいる被災地の方と合同して、例えば音楽</p>

	<p>であったり、演劇であったり、もちろんスポーツを通してもそうなのですがあまりオリンピックに捉われないもの、何かそうことをつくっていただけらと思うのです。でも、非常に難しいですね。</p> <p>これを機会に、子どもたちに海外に目を向けてもらう。それこそオリンピックですから、それぞれの国の国歌を知ってもらうとか、そういう方法はあると思うのです。そういう中に、今自分が杉並に住んでいることの意味というか、杉並に住んでいて本当によかったという、そういうものを感じ取られるようなことができたかなと思います。</p>
会長	<p>では、次に菊地委員お願いします。</p>
委員	<p>本当に難しいですね。色々考えてみたのですが、私は京王電鉄のグループ会社の人間として、今海外の方が高尾山というキーワードにすごく着目していて、毎年かなりの数の方がいらしてます。ミシュランで取り上げられるまでは、高尾山というと我々も年に1回、神社にお参りに行く程度でしたが、ミシュランで取り上げられたことによって、もう一度見直されたので、今のような状況になっていると思っています。</p> <p>色々なテレビを見ていますと「こんなことに外国人の方が興味を示すのか」ということが非常にあります。それは多分杉並区内にもたくさんあるのではないかなと思うのですが、その発信の仕方が問題ではないか、と思っています。</p> <p>それで、何をやればいいのかということはずごく難しいのですが、その取り上げ方や、海外向けの発信の仕方、海外の方が区内に着目していただけるのかなという気がしています。</p> <p>それともう1つ、全く別な切り口で、国内でどうだろうと思ったときに、私は今、仕事柄地域のお祭りに参加しているのですが、恥ずかしい話、この歳になって初めて体験することばかりなのです。例えば、「神酒所」という言葉もよくわかりませんでしたし、中にいろいろ飾りものをするのですが、町内のお年寄りの方たちもよく分からないのです。毎年「これ、どっちだっけ、どうだっけ」とやりながら、写真を撮って「ここはこうだね」と書いておいて、そのとおりに飾る。70歳、80歳のご高齢の方でもそういう状況なのです。神輿1つ組み立てられないのです。これでいいのかなと思っています。そういう面では、子どもたちもそうですが、世代の担い手の方々にもそういうものを覚えていただくというのが、やはりレガシーにつながっていく気がするのです。もう1つは、そういうものを発信していくと、逆に海外の方も興味を示してくるのかなと思います。</p> <p>思いだけで、実際に何をどうするということについては、本当に、申しわけございません、難しくて分からないのです。</p> <p>それから公会堂として何をやるか。極端なことをいうと、邦楽をやろうかということ位しか思いつきません。実際、杉並公会堂でも邦楽のコンサートはほとんどやっておりません。なぜかという、残念ながらお客さんが入らないのです。券売に影響をしてしまうので、どうしても引込み</p>

	<p>思案になってしまいます。では、なぜそうなってしまっているのか。その辺をよく考えていかなければならないと思います。</p> <p>うちの従業員で杉並区内に住んでいる人間がいるものですから「何かないかな」と尋ねましたら、西荻でこんなものをつくっているとマップを見せてくれました。これを見ると、行ったことがなく、興味を示すものがたくさんあるので、このようなものを作るのもいいのかなと思ったような次第です。</p>
<p>会長</p>	<p>現場を抱えているお二人からのご発言にあったように、具体的にこういうアイデアというのはもちろん重要ですが、考えていく脈絡を整えていくのも必要かと思います。</p> <p>今、地域のお祭りのお話があったのですが、中村委員は地域デザインやコミュニティデザインの専門の方ですので、そういう観点から、この機会にどう利用していくかということを含めてご提言いただければと思います。</p>
<p>委員</p>	<p>私も同様で、まだそんなに具体的なアイデアがあるわけでもないのですが、自分が関わり、実際に動かしているところから、幾つかヒントになればということをお話したいと思います。</p> <p>私は今、企業メセナ協議会のメセナアワードの選考委員をこの数年務めています。メセナ活動は、企業による文化・芸術支援というふうに位置づけられていますが、最近、みなさんが思い浮かべることだけではなく、例えば、生活文化の分野や、工芸のような分野、それから、ものづくり、についてきちんと目配りをした活動にも光を当てていきたいと思います。</p> <p>まだ情報を公開できないので、大賞がどことは言えないのですが、今年受賞したところは、そういう生活文化や工芸的なところにも目を配って良いスペースをつくっている活動で、自社の資源をうまく活用しているのです。</p> <p>私、杉並に昔住んでいたとはいえ、あまり詳しい知識はないのですが、そういう意味でいうと、やはり地元の企業との連携という視点はあったほうがいいのかと思います。企業といっても、別に大企業に限る必要は全くないわけで、むしろ地元の事業者の皆さんや青年会議所、商工会議所の皆さんとの連携によって、地域で埋もれていた、歴史的には面白いけれど、ちょっと担い手が途絶えているというものを発掘する活動ができると、まさにレガシーとしても意義のあるものになるのではないかなと、1つ思っております。</p> <p>それから、コミュニティデザインですが、今少子超高齢社会、いわゆる2030年問題とか、2025年問題と言われ、どちらかというとき暗いイメージで語られることが多いのですが、これをちょっと逆手にとる発想、逆転の発想も必要だと思っています。というのは、今のシニア層というのは、例えば団塊の世代の方たちも、ビートルズ世代ですから、非常にポップなシニアなのです。そういうことで考えると、まだまだ元気な方のほう</p>

が圧倒的に多いですし、むしろ、高齢先進国とか課題先進国といわれる発想がありますが、その人たちが戦後を背負ってきた、体験してきた文化というのをもう一度後づけてみる。これは、私も授業で、今の二十歳前後の学生にカウンターカルチャーの話をする、学生が結構新鮮に受けとめるのです。あまり昔話みたいにする、とよくないですが、その辺をちょっとディスプレイも考えて、杉並は、カウンターカルチャーを1つとってみてもたくさんの拠点があった地域ですし、中央線文化も色濃く出ていますから、そういうものをちょっと後づけてみる。「やるよ」と言えば、「ぜひ一緒にやりたい」とか、「提供したい」という人たちがいるのではないかなと思うので、そういうところからまちと繋がるのもありかなと思っています。

例えば、私のところの社会人の院生で、西荻で「o k a t t eにしおぎ」というのをやっている人がいるのですが、これはコミュニティスペースとして非常に面白いものですし、恐らくほかにもたくさんそういうものがあるのではないかなと思っています。

目に見えるものをさらに可視化するというので、最近の技術を使えば、オンラインのアーカイブづくりも、それほど手間かからず、そんなに凝らなければできず、そういう形でレガシーというのを遺産というよりも、目に見える形で、継続して将来に向けて形に残していくということが大事かなと思っています。

最後に、今「美しい消費と働き方研究会」というのを私が所長をしている研究所でやっているのですが、この間宿題でメンバーに、「まちで見かけた美しい消費」、あるいは、「まちで見かけた美しい働き方」を次回持ち寄って、ちょっと考えてみましょうということをやっています。このように、ちょっとまちに出て色々な題材を持ち寄る。実は、これからの消費や働き方は、広い意味での生活文化として極めて大事なものだと思っておりますので、そうしたものを集めてみるというのもありかと思っております。

色々講座などで集まってくれている、中堅から若手の30代を中心にした社会人で、非常に熱い人たちですが、やはり働き方に対する価値観が、ずいぶんこれまでとは違ってきているのです。そこから、文化的にちょっと創造的な活動にもなればいいかなと思います。

それから、オリンピック・パラリンピックということなので、当然障害を持った人たちへのまなざしは大事だと思うので、アートに関わるところで、例えばエイブルアートのようなものや、インクルーシブデザインと言われるような、これまでどちらかというところとちょっと排除されていたような人たちや、場を一緒にやれるような、デザインのあり方のアイデアも出せばいいかなと思っています。

会長

ありがとうございました。今、エイブルアートやビジュアルアート系のお話をいただいたのですが、杉並区というのは、美術館や大きなギャラリーがない区です。非常に充実した小さい画廊的なところでもしるい活

	<p>動をやっているところはたくさんあるのですが、そんなことも含めて、美術の観点から、ヤマザキさんにお話いただければと思います。</p>
<p>委員</p>	<p>この「アクション&レガシープラン」の後半の方、「第四章 文化・教育」の中の58ページですが「アーティスト・イン・レジデンス」の話が出てきます。いかにこの地域にあるレガシーを発信するかという話も書いてありますけれども、杉並の「遊工房アートスペース」という民間のところが「アーティスト・イン・レジデンス」を長年続けてやっているのです。現在も、フィンランドから詩人、オーストラリアから版画家、タペストリーの作家などを招聘していて、展覧会やイベントをしていたりしますが、そういうところを発掘して繋げていくとことが大事だと思うのです。</p> <p>また、地域の小さいギャラリーですか、「c o - u m e ギャラリー」というのが東高円寺の駅の近くにありまして、そこは女子美の准教授が学生と一緒に、空き店舗を借り上げて、中を改装してギャラリー化しています。比較的自由に学生たちが利用できるようなところで、住民を巻き込んだワークショップを連日開催しているのです。学生も学校にただ来ているだけではなくて、そこで地域と関係が持てるということで、すごくおもしろがっています。和田商店街も、いかに活性化するかということを考えていたのですが、そこと授業で取り組みをして、お母さんと子ども、赤ちゃんを持っているお母さんが商店街デビューをするという切り口で活性化を図っていこうではないかということを経験者の発案で進める等、色々行っています。</p> <p>中村先生からもお話があったように、インクルーシブデザインとか、ソーシャルインクルージョンとか、社会包摂という視点から、美術大学も今、教育が随分と変わってきています。従来は、1人の作家を育てて個性をとがらせるということに注力していたわけですが、最近は授業の大半が産学官連携から地域連携にまで広がっています。いかに一人ひとりの、普通の人たちのアーティスト的な感性を育むか、そこに気がついてもらえるかということに目が行っているのです。</p> <p>それからエイブルアートという話もありましたが、ちょっと話が飛びますけれど、1つ僕が注目していたものに「TURN展」というのがあります。障害者というか、社会から少し排除されていた人たちの活動を集めた展覧会を日本人アーティストで芸大の教授の日比野克彦という方がやっていました。第1回が今年の3月、東京都美術館で開催されたのです。全国20カ所位の障害施設の中の、かなりアクティブな活動が色々あるのです。今まではあまり気がつかれなかったものですが、実は、とてもクリエイティビティがあるのです。それらに焦点を当てて、そこに若手のアーティストが入って、何か新しいことが起こったというのを特集した展覧会をやっていたのです。それは非常に見応えがあって、今までの、隣では公募展、従来のもをやっていましたけれども、そこよりもむしろ可能性を感じたのです。多くの人が広く参加しているし、アートと関係ないと言わ</p>

	<p>れていたような人たちが、おもしろい活動をしていたりするのです。今、そういう時代になってきているかなという気がすごくするのです。</p> <p>ですから、大きなイベントというよりは草の根的な、日々の活動の中から育まれるようなものをうまく拾い上げて、結んでいって、それをネットできちんと表現、それも多言語で表現をして、アクセスしやすくするということがすごく大事かなと思っています。</p> <p>海外からたくさん東京に人が来るようになると、受け入れるのは民泊を活用しない限りは4,000万人の、訪日外国人の受け入れはまず無理だろうという話がありますよね。今までせいぜい1,000万人だったのが、いきなり4倍でどうするのだという話がある訳ですが、それは民泊を活用していくしかないのだろうなと思います。今、「エアビーアンドビー」というネットの宿泊サービスがあります。これは結構有効で、被災地によく行くものですから、石巻周辺でどこかあるかなと見ましたら、15カ所ぐらい出てくるのです。2,000円位から、結構な部屋がとれたりするのです。杉並の状況というのはまだ見ていないのですが、恐らく相当数もう出てきているのかなとも思うのですね。</p> <p>そういった動き等、点では色々あるのです。レガシーの文化遺産もそうですけれども、おもしろい歴史的なものも点ではたくさんありますが、それがうまく繋がっていないし、うまく発信されていないというのが一番の問題だと思います。その仕組みをきちんとしていくというのが一番求められるのではないかなと、私は思っているのです。</p>
<p>会長</p>	<p>先ほど、公会堂の菊地さんから、邦楽の会の話や、区の取り組みでも伝統文化の取り組みはあるのですが、ずっと日本舞踊という伝統的な世界で、また杉並区の文化団体連合会長として、できれば伝統的なものを踏まえてお考えを聞かせていただければと思うのですが、花柳委員よろしくお願ひします。</p>
<p>委員</p>	<p>私がやっておりますのは、伝統的な古典の舞踊の修行からスタートしているのですが、やはり一番は、以前文部省から依頼されて、日本の踊りで全国を回ったことがあります。</p> <p>一番主役になる花形の役を決める際に先生と相談して、極秘で学校の一番悪ぶっている生徒を、主役にすることにしました。指名された子どもはふてくされて、「こんなことやっつけられるか」「冗談じゃねえや」と言っていました。鎧兜と化粧もして、凛々しい若武者源義経にしたわけです。本人はふてくされていますから、人形と同じです。足を蹴出すときには、こっちが「よいしょ」と出して、手を挙げる時には後ろから手を挙げさせる。すねて、膨れていますから、もうやっているときも大変なのです。でも、結果としてはものすごく一生懸命やったのです。</p> <p>最後に「何年何組の誰々君です」とその子の紹介をしたところ、もう学校中が大拍手なのです。ライトを浴びてしまったから、本人も引っ込みつかないわけです。それで、その後、学校の先生に聞いたら「いや、学校</p>

	<p>一のいい生徒になってしまいました」と。だから、悪ガキにはライトを当てるとというのが、一番良いのですよ。</p> <p>それと、生徒に聞いた一番怖い先生は、「女形にしてしまえ」ということで、先生には校長命令で、女形にして「しゃなりしゃなり」と歩かせる。と言っても、先生は歩き方など全然わかりませんから、人形遣いと同じように、足を出して、手を挙げて後ろでこうやるということをやらせる。最後に「ただいま出演していただいた女形の先生は、誰々先生です」と、一番怖い先生の名前が出たわけです。そうしたら学校中がもう、本当に拍手でものすごかったのです。その後、校長先生から、「あの悪ガキも本当にいい子になって、勉強を一生懸命しています」と。「あの先生も何か静かになってしまって、みんなに親しまれています」と聞きました。</p> <p>ですから、本当に逆なことをやると、案外にみんな平和になってしまうのですね、そういう経験が何カ所もありました。これを全国三十何カ所でやった時に、これをモットーにしたわけです。</p> <p>1つの舞台でライトを浴びるということは、人生を変えるということがありますから、これからはやはり杉並区がいろいろな意味でやっていく上で、そういう方達にライトを当てて、それで自信をつけさせるということが大事だと思います。</p> <p>舞台で何かを演技する、踊るということは、自分の人生と違ったものをつくらなければいけませんから、それが体験としてはすごく良いのではないかと。舞台へ上がる時は、とにかく素人から始まって、プロになるまでには本当に大変な苦労がありますが、素人の方でも、ライトを浴びて、ちゃんと演技ができるようになれば、家庭も平和になるし、みんなも平和になる。これからの人生をどんなに力づけているかと考えると、やはりやりがいのあることだと。これも、1つの芸をやる、1つのすばらしいことだと思います。</p> <p>これは一例として、お話ししました。以上です。</p>
会長	<p>ありがとうございました。</p> <p>次は、これも非常に国も注目しているコンテンツでもある、アニメーション、日本の漫画文化から。アニメーションも実は非常に長い日本独特の流れがあって、東南アジアや中国にはものすごい影響を与えていると伺っているのですが、そういう観点も含めて、鈴木委員にお話を伺いたいと思います。</p>
委員	<p>日本のアニメーションは1917年に始まって、来年で100周年になります。そのアニメーションというのは、その前に漫画や浮世絵、絵巻等も含めて、そこから始まっているのではないかという人もいますが、フィルムとして始まったのが1917年、3人の日本人が同時に始めているのです。それは、フランス等からアニメーションの基が入ってきて、それを見て、面白いから始めようということで始まったと思うのです。</p> <p>今、アニメーションはとても盛んになってきて、世界でも評価されてい</p>

	<p>ますが、日本で最初の全体のアニメーションのミュージアムが杉並区にあります。他にも、手塚さんのミュージアム、石森さんのミュージアム、アンパンマンのミュージアム、あるいは横山先生のミュージアムがありますが、それは個人のアニメーションのミュージアムなのです。アニメーション全体のミュージアムというのは、杉並にあるのです。</p> <p>今、日本のアニメーションがとても海外に評価されるようになったので、海外からも毎日何人か、多い時は団体でミュージアムにいらっしやいます。</p> <p>アニメーションを日本で一番つくっているのはどこかという、杉並区に一番会社があるのです。最初は「東映アニメーション」や「虫プロ」は練馬区にあったのですが、どういう訳か杉並区に「東京ムービー」という会社ができ本社を置いたのです。それで下請け会社が集まりました。それが、そのうちに自分たちがつくるようになって、今は細かいところも含め137社程あるのですよ。</p> <p>僕が聞いた話では、NHKの人がずっと世界を回っていた時に、「杉並区のミュージアムに行きたい」と言うのだそうです。そんなに名前が売れているのかなとびっくりしたのですが、今の人たちは、インターネットで調べるのです。そうすると杉並アニメーションミュージアムが出てくるのですね。</p> <p>ただ、年に4万、5万ぐらいは、人がいらっしやるわけですし、もう少し便利なところに移動して欲しいです。バスに乗ると5、6分ですが、歩くと駅から20分近くかかります。海外の方は、バスに乗らずに歩いて来る方が多いので大変だと思うのです。特に雨が降ると、ちょっと気の毒になります。それから、道標があまりないのも気になります。</p> <p>フランスのアヌシーに何回も行ったことがあるのですが、そこは会場まで何メートルというような標識があちこちに出ているのです。だから、そういうものは、本当なら作って欲しい。</p> <p>それから、例えば小学校の空き教室となっているところは幾つかあるかと思うので、そういうところを利用して新しいものにして欲しいと思っています。</p>
<p>会長</p>	<p>ありがとうございました。</p> <p>今のお話の中で、道標を作るという繋がりよりも、資産を大事にする動きを作っていくというきっかけとして、具体的なことも視野に入れていく必要があるというお話として伺わせていただき、とても貴重なご意見だと思います。</p> <p>坂根委員も創作活動をやっていると思いますが、今までの話を外側から見て、何か伺わせていただければと思います。</p>
<p>委員</p>	<p>私がこの宿題をいただいてから、このアクションレガシープランの文化の部分を読んで、感じた、同じような意見をやはり皆様方も持っていらっしやる。私も同感だと思った幾つかのキーワードが、子どもと未来という</p>

ことや、杉並区内にある日本の魅力を発信していくということ、それから、草の根的なところでやっていくというようにところが同じ考えでした。

前回は申し上げましたけれども、こういう場に外国籍の私を呼んでいたということ、恐らく他の区はやっていないと思いますし、杉並区は他のところがやっていないことにチャレンジしている区なのかなという印象が、ずっと20年位、杉並に住んでいて感じたことの1つなのです。

特に、このプランを読んで、何となく引っかかったという言い方をすると批判しているように聞こえるかもしれないのですが、私はちょっと違うかなと思う部分がある、59ページのところです。例えば、1つの例なのですが、4番の「全国展開によるあらゆる人の参加・交流」というところの、四角の枠の中の例、最後のところですが「車椅子のデザインを募集して、街なかで、車椅子のファッションショーを実施」とありますが、こういうことではないのではないかなと思うのです。日本に長く住んでいて感じるのが、日本人はとてカテゴリーに入れたがりますよね、外国人とか、障害者とか。杉並が今までやってきていて、私が感じているのは、何となく日本社会を一般的な例として考えるならば、そういうところを一步も二歩も超えた、すごく先端に行く活動を常にやってきているというところが、杉並の魅力だなというふうに感じてきているのです。ですから、例えば車椅子のデザインを募集するのはいいのですが、車椅子のファッションショーではなくて、普通のファッションショーに車椅子の方もいたり、視覚障害を持った方がいたり、外国人がいたり、子どもがいたり、腰の曲がったおじいちゃん、おばあちゃんがいたり、杉並区から発信していく内容というのは、もっと本当の意味での多様なものにしていくといいなということを感じているのです。

一緒にやっていくということは大事なのですが、一緒に障害者アートプログラムをするのではなくて、アートプロジェクトにいろいろな人が参加して、みんなで作っていくという、そういう何か、もしかしたら、東京都が考えている事とずれているかもしれないのですが、杉並ならではの、杉並だからできるということがそういうところにあるのではないかなとすごく感じるのです。

もう1つが、子ども。やはり子どもたちには未来があって、子どもたちから色々な考え方を教えていくというか、多様性もそうなのですが、小さいうちから「みんな同じ人間なのだよ」というのを感じてもらうために、子どもに向けたことをたくさんやっていくということはすごく大事で、必要だと思うのです。それに合わせて、ぜひ子どもだけではなくて、学校でというよりも、家族、家庭、特に、お父さんたちを巻き込んで欲しいと思うのですね。

日本の場合はどうしてもお母さんと子ども中心で、会話もお母さんとは色々するかもしれませんが、お父さんと子どもの接点がまだまだです。最

	<p>近「イクメン」という言葉も流行っているように、お父さんたちが子育てに参加していると思うのですが、その子どもたちに向けた活動を是非、お父さんたちも参加できるような、そうやって家の中とかでいろいろな会話が自然にできるような、そういう環境を促していけたら良いなと思います。</p>
会長	<p>今、家族というテーマもありましたし、谷原委員が教育現場と地域との結びつける活動もずっとやっていらっしゃるの、そのようなことも含めてご意見伺えればと思います。</p>
委員	<p>10月に、オリ・パラのメダリストによる銀座のパレードがありましたがお出かけになった方はいらっしゃいますでしょうか。私は行って来たのですが(笑)、当然ながら計画的に行ったわけではないので、全く何も見えませんでしたけれども、あの85万人の中の1になった時に、初めて東京にオリンピックがやってくるのだなというのを実感しました。「レガシーって何だろう」と考えた時に「もしかしたら感動なんじゃないかな」と考えた次第でした。</p> <p>私も皆さんと同じように、やはりキーワードは子どもかな、と思いましたが、なぜこの85万人の、「わあ、東京にもいよいよオリンピックがやってくるんだ」と実感できるパレードが平日で、子どもが一人もないのだろうかと思った次第でした。もちろんあれだけの人数になると、安全性の面からも平日というのは当然理解できますが。</p> <p>「子ども」と考えた時に、既に小学校や中学校の現場で、色々なオリ・パラ教育が進んでいるのですが、障害者の方を呼んでいろいろなお話を伺ったり、もちろん選手の方を呼んで体験をさせていただいたりというイベントはもう全校でやっているのですが、子どもたちが、「我がまちにオリンピックが来る」という当事者意識が薄いということは、誰しも今思っているところです。</p> <p>では、どうしたらいいのかですが、東京都の研修で、ロンドンのパラリンピックの組織委員会の方の話ですが、「日本の方々は、4年後『おもてなし』という言葉をよく使われますが、私たちにとって最大のおもてなしというのは何だと思えますか」というようなお題を出されました。「私たちは、観光や、おいしいものを食べに日本に来ている訳ではありません。この国でスポーツをするために来るので、一番のおもてなしは、会場を一杯にしてください」ということを言って帰られました。確かにそうだなと思いました。</p> <p>今日は、机上の空論で良いということなので、オリ・パラの会場に、杉並区の子どもたちが一番たくさん来ましたと、国から表彰状が来る位、子どもたちで一杯にしてあげたいと考えた瞬間がありました。もちろん、子どもたちがパラリンピックの会場を見たものの感動がレガシーになっていくと良いなとも思っています。パラリンピックの会場に子どもたちが見に行きたいとどうしたら思えるか。区にある文化や芸術の財産を、どのよ</p>

	<p>うに活用していくと、子どもたちに杉並の文化を世界に発信したいと思わせることができるかというところに、1つヒントがあるのかなと思います。それともう1つ、先程のパラリンピックで言えば、ボランティアマインドをどのように子どもたちに根差していくのか、ということを経験して考えられたら良いのではないのでしょうか。</p>
会長	<p>それでは、米谷委員、こんな事に留意しなければいけないのではないかと、このような方向性を考えたほうが良いのではないかとという自由発言をいただいているのでよろしくお願いします。</p>
委員	<p>オリンピックをどうしていこうというのは、文化関係者の中でもとても盛り上がっているところと冷めた目で見ているところが混在しています。私の勤めている先は、演劇、音楽、舞踊、演芸、伝統芸能から現代ものまで、かなりのジャンルをカバーしていますので、それぞれで反応が違うのです。</p> <p>昨年から色々な方のお話を聞いていて、すごく危機感を持っているのが、今後日本はどんどん少子高齢化が進むということです。私が芸団協に勤めるようになった頃は、別にパフォーマンス、ライブで食べていけなくても、お稽古ごとをたくさん教えているので、そちらで生計は立てているから大丈夫、というジャンルがたくさんありました。ところが、今少子化で、一番若いお弟子さんが高校生ということになって、どんどんお弟子さんが高齢化しています。教える仕事もパイの食い合いになってしまい、危機感があります。伝統芸能の方々は、そこのところをかなり「ここで頑張らないと、もうこの後ない」と思っているんじゃないかと。逆に言いますと、日本の文化を世界へ、外国の方へお伝えしなくてはという使命感で、頑張ろうという方もいらっしゃるのです。</p> <p>その中で、先ほど花柳委員のエピソードをお聞きしていて、私も思い出したのですが、シンセサイザーの協会の理事をやっていた方が、64年のオリンピックの際に、小学校6年生だったそうなのです。その時は、新宿区にお住まいだったのですが、新宿区の各学校で「太鼓のうまい子、集まれ！」ということで各学校に小太鼓が配られました。新宿区で鼓笛隊が編成されて、オリンピックのイベントで演奏したということがあったらしいのです。うまかったから参加できたということが、彼にとってはそれが成功体験で、その後音楽の道に進んだ訳なのです。同じ時に集められた中に、後のバンドブームを支えたドラマーやギタリスト等が結構いたらしいのです。やはりそういうのが、実は64年のレガシーだったという話をしたことがあるのです。</p> <p>先ほどから「子ども」ということが出ているのですが、64年のオリンピックのレガシーの1つは、地域の少年少女のスポーツクラブなのだそうなのです。野球がやりたいとか、サッカーがやりたいという少年チームは、今は色々盛んにありますけれども、地域でそういったものを支えるというのが、発想として出たのが64年のときのオリンピックだったのです。</p>

オリンピックはスポーツの祭典であると同時に文化の祭典でもあるといわれているので、文化関係者がすごく喜んでいるのですが、一般の方にはなかなか「文化の祭典なんて本当？」と、受け入れていただけていないのではないかなと思うのです。

この際、各地に文化クラブというのをつくったらどうか。これは、1つには、特に中学校で、部活に先生がかかわるといことが非常に問題になってきて、先生方の負担が大きくなっていると言われてます。文化活動を地域で支えるという仕組みをもうちょっと定着させてもいいのではないかな。当初そういうことを理念的に言っていただけなのですが、去年あたりから、私どもの会員の1つで日本三曲協会というのがございまして、その中でお琴クラブを全国につくりたいと言っています。三曲とはお琴と、地歌の三味線と、それから、尺八、もともとは胡弓だったのですけれども、その三種の楽器のことを三曲と昔からいっています。今年モデルケースをつくらうという段階なので、まだまだどうできるかですが。

実は、私よりもう少し上の世代ですと、女の子はお琴を習うというのが、日本の女の子のたしなみだった時代があつて、その頃はそれなりのお家にはお琴が一面ありました。それが、今眠ってしまっている、どこかにやられてしまっています。その眠っているお琴を寄附していただいて、そこに「オリンピック記念のお琴クラブに寄附されました」というようなプレートを張って、修理しながら、地域で保管しながら、学校の1室なのか、あるいは地域の劇場の1室なのか、公民館なのかわかりませんが、そこを拠点として、教える人を協会の傘下の会員さんに募ってやっていけたらいいのではないかなという話が今、進行し始めているのです。その協会では、できれば全国500カ所位というも目標を立てているのですが、杉並区には、お琴をやっている方も、そういういった拠点になりそうな施設もたくさんあると思いますので、せめて1カ所ぐらいはつくっていただいてもいいのではないかなと思います。

お琴だけではなくて、それが別の文化クラブも併設するとか、あるいは、違う場所でも良いのですが、日本舞踊があつたり、ギターがあつたりということで、地域で子どもたちが文化的な活動ができるということの土台がつくれたらいいねという話をしています。何故かと言いますと、もともと芸団協では実演家の実態調査を5年に一度やってきているのですが、その中で、はっきりしていることは、実演家といわれている人達の仕事の6割から7割位が教える仕事で、教えることと舞台に立つことを両方やってらっしゃる。逆に言いますと、習いたい人がたくさんいる国なのです。それも、別に一流の演奏家になろうと思ってレッスンをしている人達ばかりでなく、普通にサラリーマンとして勤めているけれども、趣味のときには、何かすごいギタリストに変身するとか、普段はおとなしいOLなのだけれども、週末だけフラメンコを踊っているとか、そういう方々が、実はたくさんいらっしゃるのです。そういった、何か切りかえて、何かに集中する

	<p>という時間を持つことが、その人をすごく豊かにします。それを続けることがその人のアイデンティティ だったり、支えになる。そのように芸事をやってきた国民性というのがあるので、そこの部分をもうちょっと広げていってもいいのではないかと思います。以前ですと、家庭にそれなりの余裕があればお稽古ごとというのは普通に習わせていたのですが、今ほとんど若い世帯の余裕がなくなってきていて、塾に通わせるとか、お稽古事に月謝を払うということが難しい時代になってきているのです。そうすると、低負担で、本当に1レッスン500円、1,000円というレベルで参加できる、地域の何とか文化クラブのようなものが創られていくといいのかなというような話をしています。</p> <p>もちろん、オリンピックを記念に何か華々しい舞台作品とか、日本らしいオペラをつくらうとか、そういうことを言っている人達もいるのですが、そこは東京都や企業、そういったところにお任せしておいて、もう少し自ら参加するというマインドを高めるための仕組みとして、地域にそういう拠点が1つでも2つでもできるといいなというようなことは考えています。</p> <p>それから、パラリンピックや障害者のことで、何か文科省で障害者の文化活動の祭典みたいなのができないかと相談を受けたようなことがあるのですが、これに関しては先ほどご意見もあったように、何か障害者だけをくくるということが本当に良いのかという、すごく悩ましい問題があります。例えば、音楽のジャンルでは、目が見えないからすごく音感が発達しているけれども、別にその人は目が見えないからピアニストとした名前を売っている訳ではなくて、やはり別の優れたところがあるからプロの演奏家になっている。そのような方がいらっしゃるので、何かくくることによって逆差別しているのではないかと、いうところもあります。むしろ、色々な中に、普通に自然に色々な方が混じっているという状況をどうつくれるかということのほうが大事ではないか。そこについては、どんなアプローチが正しいのかと、ちょっと一言ではいえなくて、ケース・バイ・ケースということがある。くくる方がいいのか、いけないのかというのは、都度その都度判断しないとまずいかなと感じております。</p>
<p>会長</p>	<p>ありがとうございました。</p> <p>では、最後に副会長からよろしくお願ひします。</p>
<p>副会長</p>	<p>私も谷原さんと一緒に、子どもたちの現場にいますので、子どもたちに「オリンピックどう思っている?」「何かしたい?」と、色々聞いたりしているのです。外国人の留学生も私の回りにたくさんいまして、彼らに「東京オリンピックをどう思う?」と聞くと、いろいろ意見もくれます。</p> <p>それから、ゆうゆう館でお年寄りに英語を教えるという機会をいただいたのですが、とてもたくさん集まってしまっ。それぞれ皆さん、年代から国籍によって、いろいろなことを私に言ってくれるのです。</p> <p>私が印象的だったのは、成田東に住んでいるイギリス人のご夫妻が、「中</p>

杉通りみたいに美しいところはない」とおっしゃるのですね。「そんなに美しいの？」と言うと、「美しい！」と。みなさんどう思われますか、中杉通りを。彼は、中杉通りはイギリスに劣らないくらい美しいと言います。

私もあの中杉通りは大好きなのです。真っすぐで、JRと丸ノ内線を繋ぎますよね、歩いていても楽しいし。

オリンピック・パラリンピックはもうやると決まっていることなので、これを契機に杉並区の人達が何らか色々なことをして、杉並に愛が育てられればいいなと思うのです。

若い子達は4年先のことはあまり考えていないし、外国人も4年後には帰ってしまう。でも「この中杉通りは大事にして、世界に発信したらどうか」ということは、もうずっとおっしゃっています。それで、杉並区には美術館、ミュージアムがないので中杉通りをミュージアムにしてしまったらどうかと思うのです。中杉通りは歩いて楽しいし、何かしら使えるのではないかと思います。区内でたくさん分散してしまうと、外国の方も来にくいと思うのです。例えば、区役所の1階は特別な、何かを提供するとか、一極に集中させて中杉通りをミュージアムにするのはどうか と思うのです。でも、それは口で言うのは簡単ですが。

今、私は家建てていて、空き家に住んでいるのですがとても安いお金で入れてもらっています。例えばですが、中杉通りを中心に「空き家ドットコム」をつくって、空き家を外国人の方に提供する。このように、外国人の方に来ていただいて、空き家に入ってください。この辺り、まず区役所を中心に世界に発信できるものはどうか。

それで、私の周りにいる子たち、若い子たちで車椅子の子や、外国人もいますし、みんなに「何ができるかしらね」という意見を聞いています。みんな色々なことを言うのですが、「なみでない」という言葉を杉並区は好きですよ、「なみすけ」もありますし。ですから「なみでない応援団」という出前をしたらどうかという話が出ています。では、それはどのようにするのかというと、各中学校でもダンス部かありますからチアリーダーや学校で踊っている子たちが会場で応援する。車椅子の方達やお年寄りも、行って旗を振ってあげる。杉並区が「応援団ドットコム」をつくって、母国から応援団があまり来ていない人たちに、応援団を派遣する。例えば、すごく小さな国で、たくさんの応援団が来られなければ、子どもたちにそこに応援団として行かせるのですが、行く前にその国のことをしっかり勉強させて、そこの選手の人たちとお友達になるということもできると思うのです。子どもたちに話しをしたら「それは良い考えだ」と言ってくれました。自分が今チアリーダーをやっている子は「ぜひ、オリンピックの時に応援団としてチアリーディングで参加したい」というようなことを言ってくれたのです。若い子たちは、自分たちが何かできればうれしいし、それが思い出になる。しかも杉並の代表として「杉並」を背負って出れば、地元愛というのができますから、それは一石二鳥かなと思うのです。

	<p>それから、阿波踊りの時に「たつのおとし子連」という、耳が聞こえない方たちの連が、リズムをとって、すてきに踊っていてすごいなと思いました。パラリンピックで、阿波踊りの「たつのおとし子連」が応援できて、車椅子の子たちも一緒に応援ができたらいいなと。私も周りに車椅子の若い子たちがいるので、あの子たちが楽しい思い出を杉並の代表として参加できたら良いなと思っているのです。</p> <p>「なみじゃない応援団杉並」ということで、私としては、そういう提案をしたいと思っています。</p>
会長	<p>ありがとうございました。</p> <p>何かその他に、言い忘れたとか、他人の意見を聞いたらこれを思いついたとかであればどうぞ。</p>
委員	<p>すみません、1つ言い忘れたことがあります。このパラリンピックは、特に障害者の方で注目されていて、メディアにもたくさん出たりしています。特に障害を持った方たちに対する考え方が、まだ全然浸透していない。パラリンピックが終わって、そこで終わらないような活動につなげることが大事なのかなというのを先ほど、言い忘れてしまいましたのでつけ加えさせてください。</p>
会長	<p>ありがとうございました。</p> <p>お話を伺っていて、基本的なところでいくつか、皆さん共通の方向性を持っているということが確認できたと思います。数え上げることはしませんが、例えば「子ども」であるとか、大きなものよりも少し小さいものをつないでいって1つの形にしていこうとか。</p> <p>それから、各委員さんの中で印象に残ったところでは、後藤委員からは杉並区が持っている地域連携を生かして、被災地に向けるという方向性はないだろうかとか、あるいは、子どもたちに海外のことを知ってもらうという機会。これは、あとの委員さんも展開していらっしゃいましたけれども、それがあったと思います。</p> <p>菊地委員からは、一番印象的だったのは、公会堂の邦楽とか、そういう新しいことをやろうとする時に、そこに人を集める仕掛けづくりをやらないとアイデアだけでは進まないのだという、非常にリアリスティックなご意見。それから一方で、高尾山のように、あるチャンスがあればぱっと広がることのあるのだという、2つ、非常に対照的なご意見として印象深く伺いました。</p> <p>それから、中村委員からは、今高齢者になってきている団塊の世代たちが持っていた「文化的な遺産」を、新しい世代が興味を持っているのではないかと。それを新しく展開する。これは僕もすごく感じていることなので、特に中央線、確かに中央線文化といわれているように、ポップカルチャーについてはたくさんの遺産が残っていて、それはアニメミュージアムも含めてですけれども、そのようなことをうまく、高齢者だけではなくて、今の30代、20代の人達と組んでできるようなことが考えられたらおもしろ</p>

ろいなと聞かせていただきました。

それから、ヤマザキ委員からいただいた提案では、2つすごく印象的だったのですが、事例として挙げられた0歳児の母親の商店街デビューというお考えや、宿泊場所が点としてあるのをつないだらという案。杉並という地域性を生かしたプランのためにも非常に重要なご指摘だったと思います。

花柳委員からは、古典といっても単に鑑賞だけではなくて、それをうまく展開すれば、もっと教育的側面に展開できるし、単に伝統的なものを見せましょうという形ではない事例として、具体的なお話をいただきました。

また、同じように鈴木委員が主張なさった道標の問題。でも、考えてみるとこの道標というのは、杉並のどの施設に対しても必要ではないかと思うのです。そのことを非常に具体的にご提言として伺いました。

それから、坂根委員からは非常に幾つか重要なご指摘をいただきました。例えば子どもたちに対して思いやりの機会にすべきであるというご意見であるとか、カテゴリーに縛られずにやるべきだと。高齢者と子どもたちの事業は2つではなくて、やはり1つの事業だと思うのです。それも、その両端を挟むことによって真ん中を巻き込んでくるわけだし、何かカテゴライズしないというのは、非常に重要なご指摘だったと思います。もう1つは、家族というキーワードを出していただきました。これもやはり杉並の地域性として合っていて、非常に重要ではないかと思います。最後に、杉並ならではの企画にしないといけないということも、受けとめさせていただいたと思います。

谷原委員からは、銀座のパレードに子どもの姿がなかったと。これは確かにわかるけれども、その工夫を誰かがしなかったのだろうかというのを考えさせられるご指摘だと思います。子どもたちを会場に送りたいという、子どもたちに参加の機会を与えるということ。これは、直接競技場に送ることもあるし、また、オリンピック・パラリンピックに関連している文化事業に子どもたちをどうやったら呼び込めるかという工夫の中で、重要だったと思いました。

それから米屋委員からは、日本の芸能者たちが、レッスンプロという形で、6、7割方が教えることで生計を立てていると。日本には別にプロとなろうとしなくても、楽しみとしてお稽古事を楽しみ、それを深めていきたいというような文化があるので、非常に重要なご指摘だったと思います。合わせて、子どもの文化クラブというご指摘をいただきました。これも、今の時期から、もし杉並が取り組んで、少し先進事例をつくっていくと、三曲協会のような具体的な方たちが始めるやり方と、実際に享受する側から始めるやり方がうまく結びあっていくような流れができるといいと思いました。

最後に非常に具体的で魅力的な提案を2つ、板倉委員からいただきました

	<p>た。</p> <p>1つは、中杉通りという1つの資産を生かしながら、その周辺を含めて、宿泊とか、美術であるとかという展開を絞ってやったらどうかというご提案。それから「なみでない応援団」という、既にネーミングもでき上がっていました。応援というのは、1つの大きな交流の機会であると。自国を応援するだけではなくて、やはり色々なところを応援するというのは、思いやりということ。思いやりというのは何も慈善的な思いやりではなくて、お互いに気持ちを通じ合わせることによって人を思うという気持ちは相互に生まれてくるという、非常にいい指摘だったと思います。</p> <p>次回の審議会は、1月10日に予定されていますが、今日はこれだけ意見をいただいたので、議論を進める前提として、これをまたみんなで揉むと非常にまた大変なことになります。できれば、区で少し方向性というか、たたき台をつくっていただいて、それをもとに、もちろんそれを全否定するということも含めてですけれども、ちょっと苦勞していただいて、今日の意見の取りまとめを事務局にお願いします。その原案をもとに、次回の議論をするという進行にさせていただけたらと思うのですが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。</p> <p>では、委員の方々のご賛同をいただいたということで、区にお願いできますでしょうか。</p>
文化・交流課長	はい、了解いたしました。
会長	<p>よろしく願いいたします。</p> <p>では、非常に充実した時間を過ごさせていただきました。</p>
	(2) その他
会長	最後に、事務局から何かあればお願いできますでしょうか。
文化・交流課長	それでは、先ほど会長のからもお話ございましたけれども、次回の審議会は、年明けの1月10日を予定しております。またこちらからご案内をお送りさせていただきますので、よろしく願いいたします。
会長	<p>それでは最後に、事務連絡、その他で委員の方からご質問等、ありますでしょうか。</p> <p>予定時間よりも、大分過ぎて、本当にいい意見を聞かせていただいたこと、ここの委員構成がそれぞれ違うバックグラウンドですが、やはり考えている方向は1つ、杉並区に対して、それからやるべきことについて、ある方向性を持ちながら議論ができるなと思って、大変心強く聞かせていただきました。</p> <p>今後ともどうぞよろしく願いいたします。</p> <p>では、今日はどうもありがとうございました。</p>
	— 閉会 — (午後7時47分)

平成 28 年 10 月 25 日
西棟 6 階第 5・6 会議室
午後 6 時～

平成 28 年度 第 2 回 杉並区文化・芸術振興審議会 次第

- 1 開 会

- 2 報告事項
文化・芸術振興事業の概要
「東京 2020 アクション&レガシープラン 2016」を受けて（自由意見）

- 3 その他

【配布資料】

資料 1 : 文化・芸術振興事業の概要

参考資料 : 第 3 回杉並区文化・芸術振興審議会の開催について

平成 28 年度 文化・芸術振興事業の概要

1 日本フィルとの友好提携事業

事業名	回数	内容
杉並公会堂シリーズ (実行委員会主催)	年 4 回	フルオーケストラの迫力ある演奏を楽しんでもらうコンサートの実施。 今年度は、杉並公会堂開館 10 周年を記念事業として「ベートヴェン交響曲ツィクルス」を実施
公開リハーサル	年 4 回	普段見ることができない指揮者とオーケストラの音楽づくりを体験
出張音楽教室	年 10 回	区立小・中学校に生のアンサンブルを届けるとともに、指揮者体験、曲当てクイズ、合唱などを実施
区施設出張コンサート	年 11 回	保育園や地域区民センターなど、身近な施設でコンサートを開催
公募出張コンサート	年 4 回	公募で、高齢者施設や障害者施設などに出張しコンサートを実施
区役所ロビーコンサート	年 4 回	区役所ロビーで平日の昼休みにコンサートを実施
エデュケーションフェスティバル	年 1 回	子どもたちを対象に、コンサートやワークショップ、楽器体験などを実施

2 区民ギャラリー

展示を希望する区民の創作した作品を展示（区役所中棟 2 階）
年間 41 件程度実施（内 区主催 1 件、交流自治体 3 件、協働 2 件、後援 2 件）

3 文化・芸術振興審議会の開催

区長の附属機関として、文化・芸術の振興に関して必要な事項を調査審議

4 文化・芸術活動の助成

区民または区内に活動拠点を持つ団体等が行う文化・芸術活動に対し、事業に係わる経費の一部を助成

5 情報紙「コミュかる」の発行（19 万部）

区内の文化・芸術活動に関する情報を収集・発信。年 6 回発行

6 杉並ゆかりの文化人アーカイブ事業

区にゆかりのある文化人・芸術家に焦点をあて、その人となり、文化芸術活動の足跡や作品にかける思いなどを映像にまとめ、区の貴重な文化財産として記録・保存するとともに、区内外に区の文化的な魅力として発信

- ・これまでの出演者
 - ① 洋画家 佐野ぬい氏
 - ② 木彫家 橋本堅太郎氏
 - ③ 染織家 佐々木苑子氏
 - ④ 舞踊家 小松原庸子氏
 - ⑤ 詩人・小説家 ねじめ正一氏
 - ⑥ クラシックギター奏者 荘村清志氏
 - ⑦ アニメ監督 大地丙太郎氏
 - ⑧ 女優 渡辺美佐子氏
- ・平成 28 年度
 - ⑨ 能楽師 野村四郎氏
 - ⑩ 日本語学者 金田一秀穂氏
 - ⑪ 奇術師 藤山新太郎氏

7 「古典の日」関連事業

11 月 1 日が「古典の日」として法律で制定されたことを踏まえ、日本の「古典」について、子どもたちが気楽に参加し、体験する事業を実施

- ・日時：11 月 19 日（土）
- ・会場：座・高円寺
- ・内容：太神楽（日本各地で演じられてきた奉納芸能）、浪曲、昔あそび

8 協働提案事業「すぎなみ戦略的アートプロジェクト」

協働提案制度を活用し、「地域の民間施設等を活用した展示など、文化・芸術を育むための環境づくり」を推進

- ・まちなかギャラリーの発掘と情報収集・発信
- ・アートウォークイベントの実施 8 月上旬～11 月下旬
- ・東京オリンピック・パラリンピックに向け、都の助成金を利用して英語版のギャラリーMAP を作成予定